

氏 名 : 李 賢淑
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 247 号
学位授与年月日 : 平成 27 年 3 月 17 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 指示対象のとらえ方と指示詞の選択意識に関する日韓対照研究

論文審査委員 : (主査) 教授 高橋 久子
(副査) 教授 浅沼 茂 教授 齋藤 ひろみ
教授 金澤 裕之 教授 寺井 正憲

学位論文要旨

本論文は、日本語母語話者と韓国語母語話者の指示対象の捉え方や指示詞使用意識の異同を把握し、韓国人日本語学習者の日本語指示詞の使用状況を考察した上で、学習者の不自然な使用や学習上の困難点などの要因について、記述言語学だけでなく認知言語学的な観点からも考えることを目的とする。本研究は 4 部構成で第 I 部は第 1～2 章、第 II 部は第 3～5 章、第 III 部は第 6～7 章、第 IV 部は第 9～10 章からなる。

第 I 部では、研究の概要を述べる。第 1 章で研究の背景と目的について紹介する。続く第 2 章では、先行研究を概観し、本論文における指示詞の枠組みと問題点について述べる。

第 II 部では、現場指示を中心に実態調査や記述調査を行い、日韓母語話者、韓国人日本語学習者の指示対象のとらえ方について検討する。第 3 章では、現場指示について様々な状況の談話レベルで日韓両言語話者及び韓国人日本語学習者の指示対象の認識のあり方(物理的・心理的遠近感覚)の相違について明らかにすることを目的とし、仮説検証型のアンケート調査を行う。その結果、韓国語母語話者は、物理的・心理的な距離感が一定に維持される傾向があるのに対し、日本語母語話者は様々な状況に応じて、物理的・心理的な距離感を相対的に変化させていることが分かる。韓国人日本語学習者の現場指示の選択傾向は日本語と韓国語の中間に位置しており、韓国語の影響と日本語指示詞の学習の影響とが考えられる。第 4 章では、指示対象が現実空間にあるときと仮想空間にあるときとでは、日韓両語で対象認識のあり方がどう違うのかを解明することを目的とし、仮説検証型のアンケート調査を行う。その結果、日韓の発話現場における距離認識違いについては、次のことが明らかとなる。現実空間では、日本語母語話者は、発話現場の物理的な距離に依存しつつも心理的な距離の影響も受けているが、韓国語母語話者は、発話現場の物理的な距離に強く依存する傾向が見られる。仮想空間では、日本語母語話者は、発話現場の物理的距離や心理的距離の両方が重層的に現れる傾向があるが、韓国語母語話者は、発話現場の距離より心理的距離が優先される傾向がある。韓国人日本語学習者は、「ソ」の選択傾向が日本語母語話者に近いが、「コ」・「ア」の選択率が日本語母語話者とは異なり、韓国語母語話者に似る傾向がある。しかし、仮想空間の指示対象を指す場合、日本語母語話者よりも「ソ」の過剰使用が見られる。第 5 章では、物理的・心理的的局面を含む日韓両語の時空間・事物

に対する捉え方の相違について広範な場面での考察を目的とし、記述的な分析を行う。特に、日韓のマンガの場面を分析対象とし現場指示の「コ」系が日韓一方のみで現れる場面について、話し手のイマ・ココ意識の在処がどう指示詞選択に反映されるかという面から対照分析を行う。その結果、日本語では、話し手自身を取り巻く状況・事態を捉える場合に、「コ」を使用し対象把握を相対的に行う傾向傾向が見られる。韓国語では、目前の対象を捉える場合に、「⁴이(コ)」を使用し、言語的に事態をより一般化・具体化する傾向が見られる。

第Ⅲ部では、非現場指示を中心に記述調査や実態調査を行い、日韓母語話者、韓国人日本語学習者の指示詞の選択意識について検討する。第6章では、話し手・聞き手・指示対象との3者がどのように文脈や状況に関係しているかを文脈依存度の面から考察し、指示詞の使用・非使用を巡る日韓の言語使用意識の相違点を解明することを目的とする。特に、漫画に現れる非現場指示詞を「ソ」系の指示詞が一方のみに現れる場面を中心に、記述調査を行う。その結果、指示対象が人物の場面では、日韓のどちらかが高文脈言語であるとは言い切れず、状況や場面によって各々の文脈依存度が異なっている。また、指示対象がコトの場面では、日本語のほうが韓国語よりやや高文脈言語であることが分かる。第7章では、韓国人日本語学習者の非現場指示「ソ」と「ア」の不適切な選択の原因について、①発話者に関わる物理的・心理的な遠近感、②現場指示からの類推による時間・距離の遠近感、③肯定的・否定的ニュアンスによる発話の態度・姿勢という三つの観点から仮説を立て、学習者の指示詞の選択要因について明らかにする。非現場指示詞の既習者と未習者を対象に仮説検証型アンケート調査を行い、既習者は「ソ」と「ア」の用法を反対に理解し、不適切な指示詞の使用が多いことが明らかとなる。一方、非現場指示未習者は、独自の基準を立て指示詞を選択しており、①心理的に自分と関わりの強い人物や事柄には「ア」が選択され、自分と関わりの弱い人物や事柄に対しては「ソ」が選択されやすい、②非現場指示用法を現場指示から類推している、③否定的ニュアンスの対象には「ア」が選択されやすく、肯定的ニュアンスの対象には「ソ」が選択されやすいことが分かる。

第Ⅳ部では、研究成果を日本語指導に適用することを想定して、学習レベル別の指示詞の指導案を策定し、その課題を展望した。第8章では、日本語教科書をめぐる日本語指示詞指導の現況についての研究を踏まえ、教育現場における指示詞指導の実態や問題点を述べる。その後、第Ⅱ部と第Ⅲ部で明らかにした日韓の指示詞選択の相違や日本語学習者の困難点などの研究成果を基盤として、韓国人日本語学習者のための指示詞教育の方策を学習レベル別に検討し試作する。

本研究の教育的意義は、日韓の形式的な指示詞の対応関係に着目した対照研究ではなく、日韓の指示詞選択における言語意識や直観の違いなどがさまざまな言語状況にどのように現れるか把握できることにある。特に、日韓で指示詞選択が異なる理由について、物理・心理的な遠近感の相違や、イマ・ココを中心とした時空・事物のとらえ方の相違や、対象に対する文脈依存度の相違など、複数の角度から検討・考察を行ったことに大きな意義があり、そこに独創性があると考えられる。また、これらの研究の成果を教育的にまとめ、韓国人日本語学習者のための指導案を試作したことに一定の意義を認めることができる。今後、同試案を韓国の教育現場に実践的に適用し、同時に、検証していくことが必要であり、また課題でもある。